

福井県の成立と近世，明治期の産業

Industry in Formation in Fukui-ken, the Modernized World and the Meiji Period

南保 勝*

はじめに

- I. 「継体天皇（けいたいてんのう）」と「越国（こしのくに）」
 - II. 近世，幕末へ
 - III. 福井県の誕生
 - IV. 明治初期における福井県の産業
- 結び
- コラム（「北前船主の館 右近家」を訪ねて）

はじめに

福井県は、どのように成立したのか。その頃の産業はいったいどのようなものがあったか。こんな疑問は、福井県人であれば誰もが抱く疑問であろう。そこで、本稿では、福井県がどのように成立したのか。そして、同時期、特に近世から明治期にかけてどのような産業が栄えていたのか。そんなことをメインテーマとしながら、地域の歴史経路をたどってみることにしたい。

I. 「継体天皇（けいたいてんのう）」と「越国（こしのくに）」

福井県といえば、「越山若水」という言葉を思い浮かべる人も多いことであろう。「越山若水」とは、越前の豊かな山と若狭の清らかな水を例えた言葉であり、これらに育まれた福井県は、極めて魅力的な場所として誇りうる地域でもある。では、こうした福井県は、いったいどのようにして成立したのか。それを確かめるには、おそらく多くの人々が「継体天皇」の時代から、或いは「越国」の歴史からたどるべきだと主張するかも知れない。

参考までに、「継体天皇」とは、一説によると母・振媛の生誕の地、三国（みくに、福

* 福井県立大学 地域経済研究所 地域経済部門リーダー

井県坂井市三国町)に近い越前国高向(たかむく、福井県坂井市丸岡町高田付近か?)で50年あまりを過ごした後、507年に58歳で即位したヤマト国の天皇らしい。一方、「継体天皇」が育ったといわれる「越国」とは、現在の福井県敦賀市から北は新潟県に達し、山形県庄内地方の一部にもかかるほど広大な地域に設けられた地方区分としての国(令制国)である。6世紀の段階ではイズモ(出雲、因幡、伯耆)やタニハ(丹波、丹後、但馬)と並び日本海側の重要な拠点の一つだったと聞く。その「越国」は、7世紀後半に越前国、越中国、越後国に分割され、その越前国の国府が旧武生市(現在の越前市)にあった。国府とは、国が政務をとる中心の場所を指している。また、3国に分割された時の「越前国」の領域は、現在の石川県と、福井県の北部を含み、後の敦賀郡、丹生郡、足羽郡、大野郡、坂井郡、江沼郡、加賀郡、羽咋郡、能登郡、鳳至郡、珠洲郡の11郡にわたる広大な面積であったといわれる。その後、越前国からは718年に能登国(羽咋郡、能登郡、鳳至郡、

珠洲郡の4郡)が、さらに823年には加賀国(江沼郡、加賀郡)が誕生することになる。

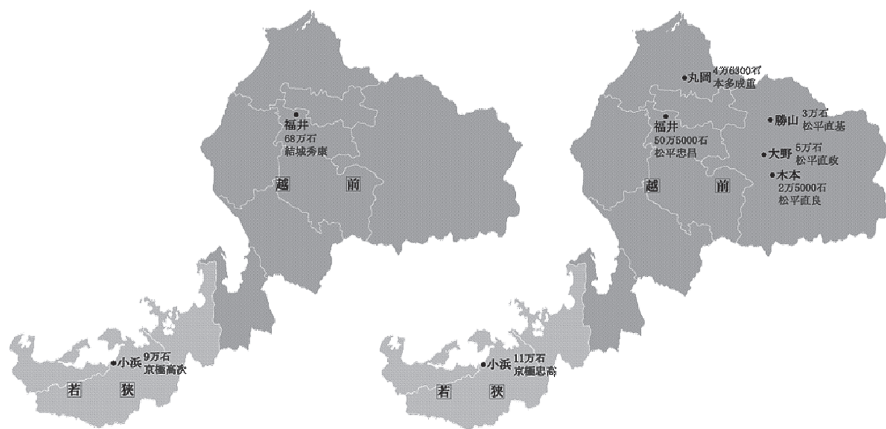
ただ、これまでの話を総括すると、この時期に現在の福井県としての若狭地方が出てこない。それもそのはず、この時期には既に若狭地方は「若狭国」として成立していたのである。では、いつの時代に「若狭国」と「越前国」が一体化し、福井県と呼ばれるようになったのか。古代史の話はこれくらいにして、時代を「越山若水」、若狭地方を含む嶺南と嶺北から出来上がった福井県の成立時期へとタイムスリップしたい。

II. 近世、幕末へ

1. 幕末の諸藩

幕末の福井地域、諸藩の在り様を知るには、その始まりとなる1600年代初頭、江戸幕府の誕生の頃から振り返らなければならない。

1600年の関ヶ原の戦い以後、それまで若狭地方を治めていた木下勝俊や越前敦賀の大



▲関ヶ原の戦い後の所領構成

▲1624年(寛永元年)の所領構成

資料：福井県編『図説福井県史』[1998]

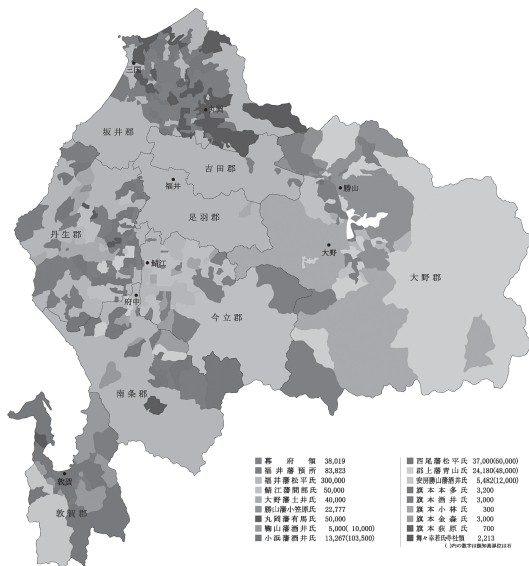
<http://www.archives.pref.fukui.jp/fukui/07/zusetsu/indexzu.htm>より抜粋

谷吉継は石田光成の西軍に味方したため領地を奪われ、徳川家康の東軍に属した府中（現在の越前市）の堀尾吉晴、北庄（現在の福井市）の青木一矩（あおきかずのり）なども領地を移された。そして、越前一国が家康の次男である結城秀康（68万石）に、若狭一国が大津城で関ヶ原の戦いの直前まで奮戦した京極高次（9万石）に与えられ、福井藩と小浜藩が成立することになる。

その後、福井藩2代目の松平忠直は、大坂の陣で戦功を立てながらも将軍に認められなかったことから、次第に幕府に反抗的態度を取るようになった。そのため、忠直は幕府から不行跡や江戸への参勤を怠ったことなどの乱行を理由に、1623年（元和9年）改易され豊後国大分に配流される。翌年の1624年（寛永元年）4月、越後高田藩で別家25万9千石を与えられていた忠直の弟（秀康の次男）、

松平忠昌が50万石で入封。その後、居城周辺の街・北ノ荘は「福居」（後に福井）と名を改められる。聞くとところによると、北という字義には、「背く、逃げる、違う（たがう）、敗れる、という意味があり、一国の主城の名称や城下の名としてふさわしくない」という者がいて、忠昌がすなおに「福居」を採りあげたらしい。確かに、柴田勝家から忠直に至るまで、北ノ庄には悲運が続いた。そのため忠昌は「福居」に改め、その後、福井の文字が使われるようになった。しかし、地名のおこりは諸説があっただかではない。もっともらしい説には、本丸あたりに「福の井」という霊泉があったからだと聞いている。

一方、若狭では、1634年（寛永11年）に小浜藩が時の老中酒井忠勝に与えられ、譜代大名の領地となって明治維新まで続く。同時に、敦賀郡では小浜酒井氏の分家が3家成立



▲ 1770年（明和7年）の越前の所領構成

資料：福井県編『図説福井県史』[1998]
<http://www.archives.pref.fukui.jp/fukui/07/zusetsu/indexzu.htm>より抜粋

した他、1682年（天和2年）に大野は譜代大名の土井氏へと領主が代わる。こうした中で、もっとも大きな変化は1686年（貞享3年）に福井藩の領知が半分に削られたことである（もっとも、幕末には32万石まで戻したが…）。この結果、越前には広大な幕府領が成立するとともに、1691年には勝山に小笠原氏が入封、1697年に紀州家の分家の松平2氏（この内1家はのちの8代将軍となる徳川吉宗が当主）の領地が成立し、1720年（享保5）には鯖江に間部氏が入った。このほか、大坂城代の土岐氏、美濃郡上藩、三河西尾藩の領地などがもうけられ、さらに旗本の諸領もわずかながら設定された。

その結果、1700年代後半の越前には、城や陣屋を持つ大名6人、それ以外の大名4人、旗本5人、幕府領も含めると実に16人の領主がいたといわれる。そして、こうした状況は概ね幕末まで続くことになる。

2. 近世、幕末にかけての主要産業

次に、近世の始まりから幕末にかけての主要産業の特徴を、福井県編「福井県史通史編4 近世二」[1996]をもとに振り返ってみよう。

本書によれば、近世、ことにその前半、越前敦賀・若狭小浜の2つの湊町は、全国的にも大いに脚光をあびていたことが記されている。北国の領主たちは、手に入れた年貢米を中央市場である上方へと輸送し、それで得た金銀で鉄砲や高級織物などの手工業品を買い求めていた。これを中継したのが、敦賀・小浜の湊町であったらしい。特に、17世紀の中ごろ、敦賀には年間2,000艘を超える船が

入津し、米だけで60万俵あまりが陸揚げされた。たぶん、行き先は琵琶湖を通って大津・京都といったところであろう。ただ、この繁栄も17世紀末に西廻航路が開かれたことで陰りをみせはじめる。しかし、近世後期には、小浜の古河屋、越前河野浦の右近家など、いわゆる「北前船主」が活躍し、この地は幕末まで引き続き全国流通に深くかかわっていたらしい。

海を生業の場とした越前・若狭の浦うらは、近世前期には中世以来の漁業の先進性を背景に、城下町の成立による新たな需要を得て大きく発展したのである。また、古代以来の塩づくりもさかんであったが、18世紀に入ると塩づくりは瀬戸内の塩に圧倒されるようになり、漁業もその勢いが失われていく。しかし、新たにサバやカレイ漁がさかんとり始め、塩づくりに代わって油桐の栽培が急速に伸びて若狭の特産となっていくのであった。

一方、農村に目をむけると、近世には越前・若狭ともに秀吉から厳しい太閤検地が行われたが、それでも17世紀中は人口増もみられ、生産力の増加がうかがえた。ただ、18世紀以降は、凶作や飢饉が続発し停滞していく。これは、越前・若狭に特徴的なことではなく全国的な状況である。

また、この時期、鉱工業の進展も目覚ましく、例えば、鉱山開発の場所として、今立郡、南条郡、坂井郡、大野郡などに金山の跡が、丹生郡、今立郡、南条郡、大野郡などに銀山の跡が残っている。16世紀中ごろより、全国各地で金銀山が開発されたが、その理由をたどれば、それまでの戦国大名の領国経営を中心とした経済から全国的な商品流通経済の拡大にともなう当然の流れとってよいかも

知れない。

また、工業製品としては、奉書紙の名が代表する越前五箇（旧今立町の岩本、不老、大滝、定友、新在家）の越前和紙の生産は云うに及ばず、越前打刃物などの生産も活況を呈した。鉄と銅を赤く熱し槌で打って槌接し、銅に焼を入れて硬くし、研磨して刃をつけて仕上げる。近世における越前打刃物は鎌鍛冶中心で、越前鎌とも呼ばれた。その他、旧松岡町（現在の永平寺町）や旧今立郡五分市（現在の越前市）、旧南条町（現在の南越前町）、旧坂井市三国町（現在の坂井市）、敦賀市などでの鋳物業、山地に自生するトチ、ケヤキ、ミズメ、ブナ、ヒノキなどの木材を鉋（かんな）、銚（せん）、鑿（みの）などで加工して、椀、膳、盆、杯、杓子、玩具などの日用木器具をつくる、いわゆる木地師なども数多く存在した。その他、大麻や苧麻（「ちよま」と呼びイラクサ科の多年草で衣料や漁網、蓆の縦糸、蚊帳用糸、苧縄用などに加工して使用されていた）や真綿、生糸・絹織物、木綿、桐油、越前焼、砥石（といし）、笏谷石などの数多くの特産物が生産されていたと記されている。特に、笏谷石は、17世紀後半に西回航路が整備されると、北へ向かう船のバラストを兼ねて多くが運ばれ、土木・建築の一般商品として、遠くは函館や江差あたりまでも規格化され販売されたという。

このように、近世、幕末にかけて、越前・若狭では農業以外の商工業が活発に営まれ、これらの生産物は北前船などの広域ネットワーク整備により全国的な広がりを見せていたことがうかがえる。

3. 近世、幕末の逸材

近世、特に後期の越前・若狭は、多くの逸材も輩出した。例えば、日本における洋学発達の歴史において極めて重要な人物、『ターヘル・アナトミア』を翻訳した杉田玄白・中川淳庵もその一人である。大野藩主の土井利忠は、洋学の受容に積極的で、藩政改革や蝦夷地開発にも努力した。

また、幕末期、小浜藩主酒井忠義は京都所司代、前福井藩主松平慶永（春嶽）は政事総裁職に就くなど、幕政に深く関与した。元小浜藩士である幕末の儒学者 梅田雲浜、福井藩士 「啓発録」の著者 橋本左内や、福井藩の財政再建で手腕を振るった三岡八郎（後の由利公正）、坂本龍馬が起草したとされる新国家体制の基本方針 船中八策の原案をつくったといわれる横井小楠らが幕末の政局に大きな影響を与えたことは言うに及ばない。その他、国学者で歌集「独楽吟（どくらくぎん）」の歌人 橘曙覧、幕末の福井藩士で米国立ラトガース大学へ留学した日下部太郎、その日下部と深い関係にある米国人で福井藩の藩校明新館で化学と物理学を教えた W.E.グリフィスなど枚挙に暇がない。また、幕末期には民衆もまた海防、幕府の長州攻め、京都警護などへ藩士とともに動員された。同時に、開国の影響が徐々に越前・若狭にもおよび、物価騰貴は著しく民衆の生活を圧迫するなど世情が激動の様相をみせる中で明治維新を迎えることになる。

Ⅲ. 福井県の誕生

1. 藩の解体と敦賀県・足羽県の成立

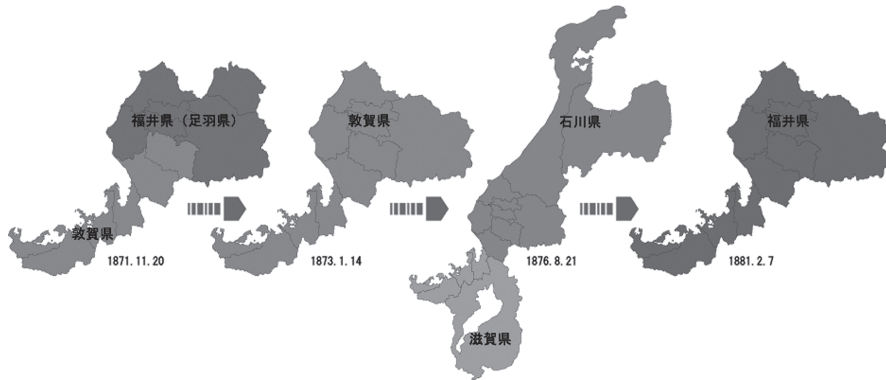
改元の詔書が出された旧暦・慶応4年9月8日、新暦の1868年10月23日をもって、元号が慶応から明治へと変わる（詔書では慶応4年1月1日に遡って明治元年1月1日と定められた）が、その1年後、1869年（明治2年）1月、薩長土肥の藩主連盟の版（土地）・籍（人民）奉還の上奏がされると諸藩も相次ぎ、福井藩、小浜藩なども奉還書を提出。旧藩主は藩知事に任命され、藩政の改革が始まった。そして2年後の1871年（明治4年）、新政府によって廃藩置県が断行され、新たに3府（京都府、大阪府、東京府）302県が成立した。これにより、これまでの藩主の上京と共に有力藩士も政府に出仕して国元を離れ、江戸時代を通じて地方に築きあげられた地方分権の時代は終わり強固な中央集権体制が東京中心に確立されたのであった。その僅か4か月後には、3府302県から3府72県に整理統合され、同年11月、若狭3郡（遠敷郡、大飯郡、三方郡）と越前今立、南条、敦賀の3郡をもって敦賀県を、他の越前5郡（足羽郡、吉田郡、丹生郡、坂井郡、大野郡）をもって福井県が置かれた。敦賀県は中央派遣の職員を中心に県庁が敦賀に置かれたが、これは実質上、旧小浜藩の解体であり、南北朝以来数百年にわたって若狭の中心であった小浜の行政的役割を終えることになる。また、福井県は旧福井藩士を中心に県庁が福井に置かれるが、旧福井藩色を嫌った新政府は僅か1か月あまりで福井県から足羽県へと県名を変更させるのであった。もっとも新政府は、旧

佐幕派（江戸幕府の補佐派）の城下町に新県庁は置きたくないという忞意もはたらき足羽県は1年あまりで消滅し、現在の福井県とほぼ同エリアの新敦賀県（1873年）が誕生、その県庁所在地が敦賀に置かれることになる。そして、こうした動きは旧足羽県側の反発を生む原因となったことは言うに及ばない。

2. 嶺北は石川県へ、嶺南は滋賀県へ

ところで、今の福井県人が当たり前のように使う「嶺北」、「嶺南」の言葉は、いつ頃誕生したのか。中島辰夫著『福井県の誕生』[2014]を読むと、そのルーツが述べられている。中島氏によると、「嶺北」、「嶺南」の言葉は、足羽県を合併した新敦賀県において、県庁の所在地を巡り、木の芽峠を境に以北に住む主に足羽県側の人々と木の芽嶺以南の人々との意見の相違により生まれたと記されている。つまり、木の芽嶺以北の人々にとって県庁所在地が敦賀にあることは何かと不便であったのに対し、木の芽嶺以南の人々にとっては敦賀県のほぼ中央に位置する敦賀が県庁所在地として適切であると反論した。こうした対立から生まれた言葉が、古代律令からの国名である「越前」、「若狭」とは異なる木の芽嶺の南北をもって分ける「嶺北」、「嶺南」という地域名が登場するきっかけとなったと記されている。

いずれにせよ、こうした県庁所在地への不満をはじめ、新政府の様々な新施策（地租改正、廃刀令、散髪奨励や太陽暦の採用、新しい学校教育の開始…）に対する不満は全国的な広がりを見せ、これに危機感を募らせた新政府は、県庁経費の節減と旧幕藩勢力のさ



▲福井県が設置されるまでの県域の変遷

資料：福井県『図説福井県史』[1998]

<http://www.archives.pref.fukui.jp/fukui/07/zusetsu/indexzu.htm>より抜粋

らなる一掃を目的に再び県の統廃合を行い、その一環として、敦賀県は嶺北7郡を石川県に、嶺南4群を滋賀県に分属させてしまうのであった。これは、ちょうど1876年（明治9年）の出来事である。参考までに、この時の日本全体を見ると、これまでの3府72県から3府35県にまで統合が進められている。

3. 福井県の誕生

前述の新政府による3府35県への統合は、違った意味での恐怖心を新政府に与えた。例えば、越前7郡を統合した新石川県は、現在の富山県をも統合し、人口規模で182万人、旧石高で220万石にも及び、人口、石高で当時全国1位の大県に達していた（中島辰夫著『福井県の誕生』[2014] p62）。この頃の日本の人口が約3千3百万人であったことを考えると、新石川県は日本全体の5.5%にあたり、富山、石川、福井の3県にも及ぶ新石川県は、いわば古代の越国の復活を想像させるものである。

こうした中、1881年（明治14年）2月7日、若狭3郡と越前敦賀郡が滋賀県から、越前7郡が石川県から分離されて、現在の福井県が成立する。初代県令は、旧彦根藩士石黒務であった。では、ここに至って何故再び福井県が誕生したのか。その理由として、中島氏によれば、まず現在の47県を基準に考えると、新政府としては当時の日本全体の人口（約3千3百万人）から試算した結果、1県当たり70万人程度を妥当と考えたこと。ちなみに、この再置県によって、関係各県の人口は、石川県70万人、富山県68万人、福井県57万人、滋賀県62万人となったらしい。それと旧石川県側は、坂井郡出身の杉田定一が指導する越前7郡の執拗な地租軽減運動、抵抗をきらったという側面も見逃せない。翌年より、毎年2月7日には旧福井藩士族を中心に「置県懇親会」が開かれたが、これは9年の空白をおいてふたたび旧福井藩を核とする県が成立した喜びの表れであったという。また、元福井藩主 松平慶永公も県令石黒氏にあてた書簡の中で、福井県の誕生を喜びと

して伝えている。一方、伝統、文化、人的・物的な交流などの面で滋賀県との関係の深い嶺南4郡にとっては協調路線を歩んでいただけない、福井県への分属は青天の霹靂となった。これ以降、10年以上にわたり嶺南4郡の滋賀県への復県を求める運動が続くことになる。

IV. 明治初期における福井県の産業

1. 日本屈指の工業地域

これまで述べてきたように、福井県は分離、統合、時には消滅という危機的状況乗り越えながらも、明治期のはじめに現在の福井県とほぼ同じ地形の県域をつくりあげていった。では、こうした歴史的背景の中で、福井県が誕生した明治初期における本県の産業はいったいどのような特徴を持っていたのか。以下では、福井県編『福井県史通史編5 近現代一』[1994]を紐解きながら振り返ってみよう。

本書では、明治初年の福井県下農村社会における諸物産の生産状況を検討するにあたり、北陸3県の概観が述べられている。その基礎となる資料は、明治7年の「府県物産表」であるが、それによると北陸3県の状況について、まず米の生産高では、新潟県など主要産出17県のうち敦賀県（福井県）が12位、石川県が10位、新川県（富山県）が4位となっている。また、菜種では、愛知県をはじめ主要産出14府県のうち敦賀県が9位、石川県が10位、綿織物では、大阪府をはじめ主要産出11府県のうち新川県が2位となっている。次いで、麻類では、栃木県をはじめ主要産出9県のうち敦賀県が2位、蠟（ろう）類では、

大阪府をはじめ主要産出10府県のうち敦賀県が4位に入っている。こうした北陸3県の主要産物の生産状況からみても、当時の全国63府県の中で、敦賀県（福井県）の農村商品生産は比較的高位にあったことがわかる。

しかし、当時の敦賀県（福井県）での物産生産力の特徴はそれだけではない。本書によれば、当時の敦賀県下の諸物産の構成比と全国のそれを比較すると、次の特徴を見出すことができる。第1に、表1-1から、物産合計額の全国（370,786千円）と敦賀県（7,831千円）を比較すると、敦賀県は全国の2.1%を占めていることがわかる。現在の福井県は人口比で全国の0.6%程度で出荷額等も全国比0.8%程度である。確かに、当時の人口は全国比で1.7%程度を占めていたことから、全国に占める産額のウエイトも現在より大きくなることはわかるが、当時の人口比を斟酌しても2.1%はかなり大きい。つまり、福井地域は、近世から明治にかけ、日本屈指の工業地域だったのである。

2. 和釘の生産では日本最大

第2に、敦賀県が全国平均と比べて低率なのは、米麦雑穀を筆頭に、加工原料作物、・飲食物であり、反対に全国平均をかなり上回るのは、農産加工、水産物、器具・船舶となっている。すなわち、農林水産物が全国平均を下回るのに対し、工業物は全国平均をかなり上回っており、敦賀県下の加工商品生産の進展度がかかなり高かったことをうかがわせている。ちなみに、農産加工の分野では、織物（奉書紬、木綿縞、白木綿、布、蚊帳）・油蠟類（木の実油、蠟燭）・生糸・麻糸・綿糸・

製茶・紙類の品目が、器具・船舶では、金属加工品（釘・鉸・針・刃物類・農具）が主要なものとなっている。また、この事実をさらに確信させる文献として、古島敏雄著『体系日本史叢書12産業史Ⅲ』[1985]では、福井県が明治初期において鉄製品製造、特に和釘をはじめとする鉄製品生産の一大拠点であったことが記されている。

本書によれば、「敦賀県では織物が第1位にあるが、これは後年顕著な発展をとげる羽二重生産によるものではない。絹織物の比重は高いが、それは奉書紬・糸織縞（両者計11万1,727円、織物合計の32.2%）のような太糸によるものである。羽二重の発展は明治20年代以降のことである。麻布・蚊帳など麻製品が最も多く14万895円で織物類総価額の40.7%であり、木綿も8万1千余円産している。特色は、これよりも第2位の金属加工4.3%にある」と述べたうえで、さらに古島氏は、敦賀県の金属加工業について次のように述べている。「敦賀県の金属具の名産に越前鎌がある。物産表には4万9,129円、97万挺（ちょう）があげられている。このほかにも包丁・斧・鋏・錐（きり）・蚤（のみ）・鋸（のこぎり）など刃物類の1万7,812円があり、その他農具類も多く、刃物類の主要生産地の一つとなっている。刃物類は、兵庫県姫路周辺の飾磨県が第1位で5万8千円、大阪・京都がこれについて4万円前後、敦賀県は第4位となっている。敦賀の鉄製品生産地としての特徴はこれらのほかに釘、鉸・針等の最大の産地であることにある。直接これら商品の全国総生産額を計算してはしないが、これらをその一部に含む器具・道具類のほぼ80%を生産する20県でこれらの生産物を95

万余円生産するうち、敦賀県で31万8,340円（33.4%）を占めている。金属加工としたものはこの釘の類のみである。これらに次ぐものは新潟県18.4%、大阪の10%、静岡の9.5%等である。釘はもちろん和釘であり、この後輸入洋釘に圧倒されて国内生産は失われ、明治40年代に入って、再び大阪中心に新しく洋釘の生産が始まるのである。敦賀県は釘類・刃物類・金属製農具類生産の中心地として、江戸時代から鉄製品生産地帯の地位を占めていた。農具・刃物類をも加えれば器具・金属製品の生産額は総生産額の5.8%となる。これが加わって敦賀県が工業県となったことは江戸時代の鉄製品工業の中心地がここにあり、それが明治7年まで続いたことを示す意味をもっている。その具体的な姿は今日未だ十分に解明されていないのである…」(古島敏雄著『体系日本史叢書12 産業史Ⅲ』[1985] pp87-88) と、和釘といえば新潟県の金属洋食器産地 燕・三条産地を連想するが、明治初期、福井県の和釘生産量は新潟県のそれをはるかに上回り、日本一の生産を誇っていたのである。

いずれにせよ、明治7年の「府県物産表」には、敦賀県の生産物構成が、農林水産物61.3%（全国68.9%）工鉱産物38.7%（全国31.1%）で、商品経済化の進展度が高く、明治の初めから、いや江戸時代から、福井県は農業地域というよりは工業地域として栄えていたことをうかがわせている（表1-1）。ただ、主力とする和釘が洋釘へと変化する中で、福井の金属加工業も新潟県の燕・三条産地と同様に、その地位を落としていったのではないか。そして、明治20年以降の言わば産業革命期に入ると、輸出向け羽二重を中心

表1-1. 全国・敦賀県の諸物産構成比（明治7年）

物産名	全国 (%)	敦賀県 (%)	主要品目価額比率 (敦賀県) (%)
米・麦・雑穀	49.6	45.4	米38.4, 麦2.5
蔬菜, 果実	3.3	1.5	蔬菜1.3
加工原料作物	8.3	5.1	菜種1.6, 煙草0.5, 麻1.3, 綿0.7, 染料0.2
禽獣類	2.0	0.1	
林産物	3.3	5.3	炭2.5
水産物	1.9	4.5	鯖2.2, 海藻類0.1
肥料・飼料	1.1	0.2	
飲食物	12.0	5.9	醸造物5.5
農産加工	11.9	14.8	油蠟類3.3, 織物4.4, 生糸1.5, 製茶0.5, 紙類0.5
水産加工	1.3	1.8	藤竹器類0.5
陶漆器	0.8	0.9	漆器類0.5
雑貨手芸品	1.9	5.5	
器具・船舶	1.3	5.4	釘4.1, 鎌0.6
その他加工品	0.2	1.4	傘0.2
金属・石鉱	1.1	2.2	石炭1.2
計	100.0	100.0	
(千円)	370,786	7,831	
農林水産物	68.9	61.3	水産物までの合計+肥料・飼料の2分の1
工産物	31.1	38.7	飲料物からの合計+肥料・飼料の2分の1

注：敦賀県は明治7年『府県物産表』、全国は古島敏雄『産業史Ⅲ』による。
資料：福井県編『福井県史通史編5 近現代一』[1994]p475より抜粋。

とする絹織物が飛躍的な伸びとなり、明治期の終わりには群馬の桐生産地をも凌ぐ勢いをみせている。一方で、重化学工業は阪神・京浜両地帯に集中するという国内産業の特質から、福井県には機械工業はまったく形成されず、結果として農業と軽工業である繊維工業を柱とする産業構造を創り上げていったのであろう。

結び

最後に、蛇足ではあるが、和釘を主力とする金属加工産地の燕・三条産地は、運よくその加工技術を煙管、矢立、そして明治の終わりには戦後まで主力となる洋食器（ナイフ、フォーク、スプーン）に向かわせることに成功する。しかし、福井県の金属加工工業は、い

ったいどのような変貌を遂げたのか。ひょっとして、その技術は、1905年（明治38年）に増永五左衛門翁によって突如出現するめがね枠産業等を中心とした線材の加工技術として活かされていったのかも知れない。

コラム

「北前船主の館 右近家」を訪ねて

先日、越前海岸の南端、敦賀湾の入り口に位置する旧河野村(福井県南条郡南越前町河野)を訪ねた。当地には、江戸時代から明治時代にかけて北前五大船主として名を馳せた「北前船主の館 右近家」がある。そもそも北前船とは何か。蝦夷地と大阪を西回り航路(日本海航路)で結び、船主自らが立ち寄る港々で商品を買付けながら、それら商品を別の港で販売し利益を上げる買積み廻船のことをいうらしい。

ところで、江戸時代、武士の給料は米を単位として与えられていたが、北海道の松前藩では米が取れないため、家臣には漁場が与えられた。家臣は、自分の漁場で取れた漁獲物を本州の商人に売り、生計を立てていたが、商いに熟れない家臣たちは商人に漁場での商売を任せ、商人から運上金を取り生計を立てるようになった。そこでできた制度に場所請負制というものがある。これは、松前藩の家臣が自分の漁場での商いを商人に任せた特権制度であり、場所請負人とは特権を与えられ運上金を収めた商人のことを指す。江戸前期から江戸中期まで場所請負人の特権を握った近江商人は蝦夷地の産物を荷所船に乗せて敦賀や小浜の港に運んだ。この荷所船の船頭として越前や加賀の船乗りたちが雇われていたのである。しかし、江戸時代中ごろになると、蝦夷地に進出してきた江戸商人によって近江商人が衰退していく。この近江商人の衰退により、荷所船の船頭をしていた越前や加賀の船乗りたちは、これまでの経験を活かして、自分で船を持ち買積みという商いを始めるようになったのである。これが北前船の始まりともいわれる。各地を寄港しながら自分で安く商品を仕入れ、高く売れる港で売却する北前船の買積みという商い方法は、運賃積と異なり大きな利益を生み、主に西回り航路で蝦夷と大阪を結ぶ北前船の時代は明治の中頃まで続いたという。

では、北前船は何を運んでいたのか。大阪から蝦夷地に向かう荷を下り荷と呼び、大阪や下関の港では、竹、塩、油、砂糖、木綿、紙、たばこなどの日用雑貨を、小浜や敦賀の港では、縄、むしろ、蠟燭など、新潟や坂田の港では米などを積み込んだという。逆に、蝦夷地から大阪に向かう荷を上り荷と言い、カズノコ、コンブなどの海産物やニシンを積み込んだ。北前船の一航海の利益は、下り荷と上り荷を合せた収益から、船乗りの給料、食費、船の修理代を差し引いたものであった。明治5年の「八幡丸」の収支報告を見ると、収入は下り荷が223両、上り荷が1,169両、その他146両、合計1,538両。支出は724両で、差し引き814両の利益が出ている。こうしてみると、上り荷の利益が極めて大きいことがわかる。当時、蝦夷地で取れたニシンは田や畑の肥料として大量に使用されていた。千石船一航海1000両と呼ばれた北前船の収益の多くは、上り船のニシンだったのである。

さて、話を右近家に戻そう。旧河野村にある右近家は、いったい何時頃誕生したのであろう。一説によれば、初代、右近権左衛門が一軒の家と一槽の船を持ち、船主として名乗りを

上げたのが延宝8年(1680年)の頃と言われる。その後、右近家の廻船経営が明らかとなるのは、江戸時代の中頃、天明年間(1781~1789年)、7代目権左衛門の頃からである。7代目は蝦夷地と敦賀・小浜等を往復し物資を運ぶ近江商人の荷所船の船頭をする傍ら、自分で物資を売買する買積み商いを始め、次第に北前船主としての道を歩み出したのであった。こうして北前船の基礎を築いた8代目、繁栄を極めた9代目と続いていく。10代目は、明治時代中頃から衰退していく北前船主の中でいち早く汽船を導入し輸送の近代化をはかる一方、海上保険会社の創立など事業の転換をはかった。11代目は、日本海上保険会社と日本火災保険株式会社の合併や右近商事株式会社など経営の基盤を確立した。そして、12代目、安太郎氏は右近家の歴史と伝統を受け継ぎ日本火災海上保険株式会社の社長を長く務める一方、旧河野村の北前船歴史村事業に賛同し、本宅を村の管理にゆだね「北前船主の館 右近家」として一般に公開し、現在に至っている。

いずれにせよ、北前船の船主が当地に存在していたという事実は、15~16世紀、あのコロンブスやマゼランが活躍した大航海時代を彷彿させるものであり、さらに、小浜、敦賀、三国など大陸文化伝来の玄関口として栄えた地が存在していた事実と合わせて考えれば、福井県そのものが古より広域ネットワークの拠点として、経済、文化、人的交流等の面で極めて重要なポジションを担っていた事実を認めなければならない。

【参考文献】

- ・ 福井県編『福井県史通史編1 原始・古代』
[1993] 福井県印刷出版協同組合
- ・ 福井県編『福井県史通史編3 近世一』
[1994] 福井県印刷出版協同組合
- ・ 福井県編『福井県史通史編4 近世二』
[1996] 福井県印刷出版協同組合
- ・ 福井県編『福井県史通史編5 近現代一』
[1994] 福井県印刷出版協同組合
- ・ 福井県『図説福井県史』[1998] <http://www.archives.pref.fukui.jp/fukui/07/zusetsu/indexzu.htm>
- ・ 司馬遼太郎著『街道をゆく18 越前の諸道』[2014] 朝日文庫
- ・ 中川辰夫著『福井県の誕生』[2014] 文芸社
- ・ 古島敏雄著『体系日本史叢書12 産業史Ⅲ』[1985] 小川出版社
- ・ 隼田嘉彦、白崎昭一郎他著『福井県の歴史』
[2000] 山川出版
- ・ 日本福祉大学知多半島総合研究所編『北前船と日本海の時代』[1997] 校倉書房
- ・ 中西聡著『北前船の近代史—海の豪商たちが遺したもの—』[2013] 成山堂書房